

畜研だより

平成28年10月号

発行 富山県農林水産総合技術センター
畜産研究所
〒939-2622 富山市婦中町千里前山1
TEL 076-469-5921 FAX 076-469-5945
<http://www.pref.toyama.jp/branches/1661/chikusan/>

技術情報

タテヤマヨークⅡの肥育成績

～季節による肥育成績の違いを解析し、

改善対策の必要性を理解する～

1. はじめに

夏の暑さもひと段落し、台風の影響もあり、すっかり秋めいてきました。季節の変わり目は、人間と同様に豚でも体調を崩しやすく、急な冷え込みや寒暖差により下痢などの症状が出やすい時期ではないでしょうか？家畜を飼養するにあたり、温度管理に一番気を遣う時期だと思いますが、物言わぬ家畜のためにも、しっかりと管理をしてあげたいものです。

畜産研究所種畜供給センターで飼養している豚は、SPF豚であり、特定の病原体を持っていない豚です。そのため、種畜供給農場に適していることや、様々な研究を行う上でも重宝されています。H26.3には「タテヤマヨークⅡ」が系統認定され、供給を開始しています。

今回、タテヤマヨークⅡの純粋種産子の肥育データを解析し、季節による肥育成績の変動をみることにしました。このことにより、夏の暑さや冬の寒さの影響を再認識し、改善対策の必要性を理解して頂きたいと思えます。

2. 材料および方法

H26.11 から H28.9 までに当センターから出荷されたタテヤマヨークⅡの純粋種産子 444 頭（去勢 159 頭、雌 285 頭）の肉豚出荷データを用いました。調査項目として、出荷日齢、日増体重（DG：8week～出荷）、枝肉重量、背脂肪厚を用いました。また、季節による出荷成績の変動についても調査しました。

当センターでの飼料体系は 8 週齢から出荷まで、ペレット状飼料（TDN70%、CP13%）を一貫して給与しています。SPF 環境を維持するために加熱処理した飼料しか与えられないこともあり、一般農場のように肥育前期・後期といった飼料体系ではありませんが、栄養価では低めの飼料となっています。毎週体重測定を実施し、105 kg を確認後、翌週に出荷しています。

3. 結果

はじめに、肉豚出荷日齢を図 1 に示します。平均出荷日齢は去勢で 145 日齢、雌で 148 日齢と、5 ヶ月齢を下回っていました。中には、120 日齢台で出荷されている肉豚がいるなど、発育の良さが示されました。

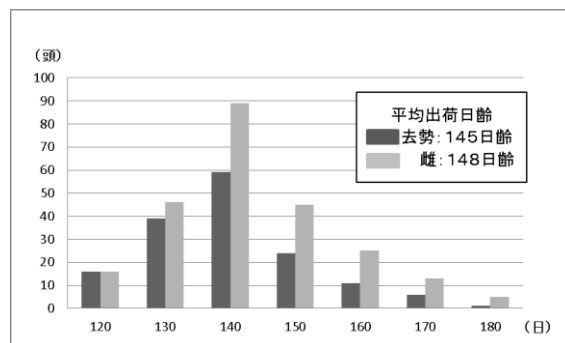


図 1 タテヤマヨークⅡの出荷日齢

次に、枝肉重量と背脂肪厚の関連性について図 2 に示します。図中の黒枠は上物の範囲である枝肉重量で 65～80kg、背脂肪厚で 13～24mm の範囲を示しています。平均背脂肪厚は去勢で 21.7mm、雌で 17.7mm でした。上物範囲内に収まっている割合は去勢で 58%、雌で 69% でした。去勢では、発育が良い反面、少し背脂肪が厚くなる傾向にありました。

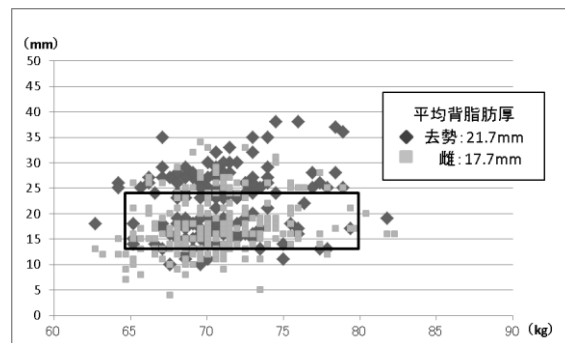


図 2 枝肉重量と背脂肪厚の関連性

最後に、去勢と雌を合わせたデータを用いて、出荷日齢と日増体重の季節変動について図3に、背脂肪厚の季節変動について図4に示します。気候のよい春や秋には、よくエサを食い込み、日増体重が増え、出荷日齢が短縮していることが分かります。しかし、夏の暑熱や冬の寒冷により、日増体重が低くなり、出荷日齢が延長していることが分かります。11月出荷豚と3月出荷豚では日増体重が平均して約200g/日も違っていることが分かりました。また、11月出荷豚では背脂肪が厚く、反対に、3月出荷豚では背脂肪が薄くなっていることが分かりました。快適な気候だと、エサを食べただけ脂肪に栄養がまわり厚くなり、寒いと熱を生産するため脂肪を燃焼して薄くなると考えられました。これらのことから、豚の肥育成績は飼養環境にとっても影響されていることがわかりました。

以外からのストレス（疾病など）の影響が少ないSPF環境のありがたさを感じることが出来ました。今後ともSPF環境の維持、研究に邁進していきたいと考えています。

（養豚課 米澤研究員）

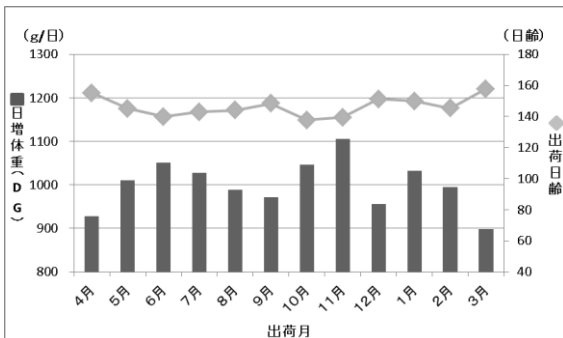


図3 出荷日齢と日増体重の季節変動

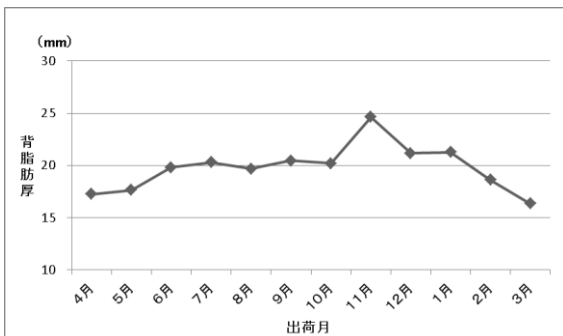


図4 背脂肪厚の季節変動

4. まとめ

今回、タテヤマヨークⅡの出荷成績について、季節変動を軸に解析してみました。その結果、肥育成績は季節などの、環境から受ける影響が大きく関与している事がわかりました。今後の研究では、この環境から受ける豚のストレスを行動解析やストレス物質測定などからも解析していきたいと考えています。また、様々な研究を行うにあたり、飼養環境